

縁の下の力持ち



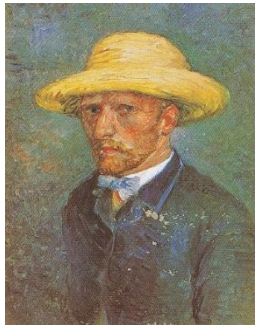
「画材屋の親父」 筆者作

大谷泰一郎氏がモデルです。

世間には美術を愛好する人がいる。まず作品を制作する人。そして次は、それをお手伝いしながら制作を応援することが好きな人。最後に、美術館で作品を鑑賞したりコレクションしたりすることが好きな人の三つに分けられるようだ。

放課後の高校美術室に出入りする生徒たちも『作品を制作する人』と『その友人』たちだった。

三つの分類の中でも、制作をお手伝いすることの好きな人の代表的仕事が画材店経営ではないだろうか。



「弟テオの肖像」

ゴッホ作



「ズボロフスキーの肖像」

モディリアーニ作

ゴッホの弟テオにしてもそうだろうし、モディリアーニのモデルにもなったズボロフスキーもそうである。鹿児島県では大谷画材店を経営している大谷泰一郎さんもそのうちの一人。その優しい心遣いは出入りしている美術仲間の間では衆目の一致するところだ。八・六水害の時には、預かっていたたくさんさんの展覧会出品作品を二階にあげることで時間を取られてしまい、自店の商品が濡れてしまったこともあった。そんな人柄と風貌が好きで私は大谷氏をモデルに頭像をつくったことがある。

画材店の数でその町の文化度がわかる。店の主人はその町の芸術家の事ならなんでもご存知で、作家仲間の相談役であり、縁の下の力持ちたり得る存在だ。その大谷画材店が今年2月をもって閉店することを本人から聞いた。自分の青春時代からの古巣が無くなるような寂しさを覚える。私が高校生の頃、休日に画材店に行って店の人に絵の具の話や聞くことで自分の創作エネルギーがどれほど湧いてきたかと思うと、その影響は意外にも大きい。不思議にも画材屋にいただけで、とても心地よい気分にも包まれていた。

インターネットの普及はある意味便利だが、書店や文房具店、画材店の経営を困難にしている。そしてそれは、作家たちの思いを語れる心の触れ合いの場を消していくことにつながるデメリットを併せもっているのだ。

これまで自分を育ててくれた画材店に感謝。

2024年2月